短期大學英文科創立30周年を迎えて

竹　内　美恵子
（短期大学部長）

駒澤短期大學は，戦後短期大学制度が制定されたのと殆んど同時の昭和25年（1950年），仏教科（二部）の創設から発足しました。やがて昭和37年（1962年），国文科及び英文科が増設され，さらに昭和42年（1967年），私立短大では我が国最初の放射線科が設置されて今日に至っています。

私は英文科が発足して間もない頃，非常勤講師として出講いたしました。当時私は都内の女子大学併設の短大が専任校でした。10年以上男子禁制の環境に馴らされていたせいか，駒澤大學のキャンパス内で多くの男子学生や体育系のユニフォーム姿の大柄の学生を見た当初は腰が抜けるほどびっくりしました。また，今では瞼の裏に存在するだけの大学の古い校舎内で戸惑ったことの一つは，仲々目的の教場に辿りつけなかったことでした。迷路のような廊下や階段をさまよう内に時間が迫ってきた事が気になり，失礼とは存じながら既に授業が始まった教場の真ん中を通り抜けさせていただき，やっと目的地に到着できたものでした。老紳士の先生がにこやかにお通し下さったことなど懐しく思い出します。

国文科，英文科創立当時，定員は20名か30名ほどの小クラスで，その中に数名の男子学生がおとなしく教場のすみの方に坐っていました。私が英文科の専任になった昭和40年代には，今はない3号館の狭い部屋が研究室になっていました。備え付図書や備品等は充実しているとは言い難かったのですが，当時の学生（国文科，英文科とも現在同様女子のみになっていた）の何人かは自発的に読書グループを作って英文科研究室に集い，よりよい学園生活を送りたいと非常に意欲的に行動していたことは大きな喜びでした。その希望が結実できた理由の一つは，国文科，英文科には卒業生の副手がいて教務事務の他，後輩にあたる学生たちの面倒を見たり助言したりする，その上，学生の読書グルー

プの一員として夏の合宿の世話をするなどして雰囲気づくりに献身的に活躍していましたが，昭和44年(1969年)におこった学園紛争の影響を受けて，この副手制度も廃止されてしまいました。丁度そんな時代でしたが，英文科と文学部英米文学科との学生間交流が盛んで年に2回ほど私ども教師も招かれて日帰りのバス旅行を一緒に楽しんだこともありました。概して当時の学生は積極的で相談に部屋を訪れて，見聞した事の報告から始まって数人が加わっていつの間にか話題が人生や恋愛まで膨んで時のたつのも忘れてしまうほど白熱して語り合った事もたびたびありました。私にも(？)彼女たちにも素晴しい青春の一コマでした。

国文科，英文科は誕生して今年は30年になります。人間でいえば若さと知性のバランスのとれた30歳代になりました。創立されてから現在までをふり返ってみると，私どもは各時代の先端を行ったとは到底いえないけれども，各時代の流れに即応し社会のニーズに対応できるような人材を世におくり出せるように学生を教育し育成する努力は惜しまなかったと自負しております。しかし，我々は今好むと好まざるとに拘らず，大学の冬の時代を迎えざるを得ない現実に直面していますが，我々は厳冬の真只中にただ手を拱いているのではなく，真冬の寒さの中でも未来に向けて大飛躍するために，高度の技術と英知とをかね備えた若い学究の先生方が，情熱と実行力で行動して下さることを私は心から期待して止みません。